

COLUMN

Kaori Nakano

マリーは闘争せず、ただ自由と自分らしさを買っただけ

中野香織 (服飾史家)

20世紀ファッション史は、社会の変化とわかりやすく連動していた。

新しいファッションを世に問い、それによって世界の景色を変えてしまったクリエイターがスーパースターとなった。ココ・シャネル、イヴ・サンローラン、ヴィヴィアン・ウェストウッドにジョルジオ・アルマーニ。彼らは自分がフィットしない古い慣習や価値観を疑問視し、時代にふさわしい新しい人間像を提示することで、同時代人を覚醒させた。結果として同時代人の脳内を変え、社会をより望ましい方向へと動かしていった。

理不尽な権威や因習を覆し、内側から生まれる感情に対して忠実に創造することで、社会をより良い方向へと変えていく。これは19世紀の芸術家がおこなっていた、ロマン主義運動そのものである。本物のロマン主義は骨太なのだ。

綺羅星のような20世紀ロマン主義デザイナーのリストに当然、並ぶべき大御所、マリー・クワントもついにドキュメンタリー映画になった。1940年代から現在にいたるまでの社会変化を背景に、マリーがどのように時代と関わり、ファッションを変え、長期にわたり仕事を続け、世界に影響を与えることができたのかが、アーカイブ映像や関係者のインタビューを通して濃やかに描かれる。インスピレーションに満ちた新しい発見の喜びが押し寄せる幸福な90分である。

発見の最たるものは、マリーがシャイであったこと。飛行機から降りられない事件ははじめ、常に夫のアレキサンダーの後ろに控え、夫の次に話をしていたという慎ましさは、意外すぎた。破廉恥と言われても堂々とミニスカートををはき、自身でプロモートした大胆さからは考えられないギャップである。

とはいえ、内気であるからこそ、外交的なアレキサンダー

との相性が抜群だったのだろう。ビジネスパートナーのアーチャー・マクネアとの相性も、会社を育てたこの三者の絶妙なバランスときたら、完璧である。内にもって創造する天才デザイナーのマリー、華麗な社交で影響力を及ぼすカリスマPRのアレキサンダー、そして冷静にビジネス戦略を展開するキレ者経営者のアーチャー。天の配材ではないか。この三者のうち誰か一人が欠けても、世界の風景を一変させるファッションビジネスは成功しなかったであろう。

また、次に大きな発見だったのは、マリーが実は闘争や抗議行動を一切していないこと。マリーはいつも、ただ自分に正直な行動をしているだけだった。自由に自分らしくあった結果として生まれたミニスカートが、若者革命の象徴となり、反・権威の意味を帯びていったにすぎなかった。

自身に正直であることを貫くだけで周囲を変えてしまうマリーの「あり方」は、ビジネスの交渉でも有利な結果をもたらす。無理難題だと思われる依頼を相手に交渉するときは、決して無理強いせず、しかし妥協もせずに「相手の反応を待つ。何も言わずに」。その結果、「最後には必ず勝ってしまう」。自由で自分らしくあることは、かくも無敵なのだ。自由すぎて年齢詐称までしていたのは、ご愛嬌。

現在は、ビジネスの権利をすべて日本に譲り、引退している92歳のマリーだが、彼女は40年ほど前の日本の女子学生とのささやかな交流を覚えているだろうか。自分が着たい服を作り、ロンドンを世界のファッション都市に変え、ついにはエリザベス女王から大英帝国勲章まで受勲されたマリー・クワントにしばれた学生は、イギリス文化研究としての卒業論文に彼女のことを書くことにした。教授陣から「軽薄なファッションはアカデミズムのテーマにはそぐわない」と反対されたが、未来を見て押し切った。



とはいえ、インターネットなど存在しない時代、資料はほとんどなかった。かすかな光を求めて、学生はマリー・クワントのロンドン本社に手紙を書いた。数週間後、ブランドの資料一式が詰められた大きな封筒が届き、学生はそれをもとに卒論を書くことができた。教授のひとりは、「いいんじゃないですか」と評した。「どうでもいいんじゃないですか」という意味だったとしても、学生はその後、服飾史家という肩書で18冊ほど単行本や翻訳書を出すことができた。

時に恥ずかしそうに笑い、時に集中してデザイン画を描くマリーの瞳の奥には、自身が自由であるからこそ遠い国の見知らぬ若者にも手をさしのべられる、フェアで寛大

な優しさが一貫して光っている。

21世紀に、多くのデザイナーが、マリーの功績に対するリスペクトを、モチーフやデザインを通して表現している。それも素敵なことだが、私たちが継承すべきマリーの功績は、自由で自分らしくあることを貫くことの価値だろう。それが結局は、他者の自由と他者らしさの尊重につながるからだ。マリーのメッセージは、多様な価値観をもつ人々と手を携えて社会平和を築くことが求められる現代においていっそう、力強く響く。